# 2016年度
# 第１回アクティブ・ラーニング研究会　報告

上段：小出和重先生　櫻田忍先生　　下段：会場内の様子

2016年10月27日（木）、本年度第１回アクティブ・ラーニング研究会が本学上尾キャンパス4403教室を会場として開催された。埼玉県教育局から小出和重氏と櫻田忍氏を講師としてお招きし、前半は小出氏に「学習の科学に基づく授業づくり――アクティブ・ラーニングが目指すもの」と題してご講演頂き、後半は櫻田氏にご教示頂きながら、実際に或る県内の高等学校において実施された社会科の授業を体験した。参加者は本学の教職員を合わせて19名であった。

前半部分では、学習指導要領の改訂にともなう新たな学力観の変遷を概観した。平成28年にまとめられた次期学習指導要領では、「何を学ぶのか」という学習内容に関するものだけでなく、「どのように学ぶのか」、そして「何ができるようになるのか」という方法論やアウトカムが同様に重視されるようになる。その具体的な方向性は、生徒が主体的に学ぶように授業を設計することである。そして埼玉県内の中等教育機関におけるアクティブ・ラーニングの実践が紹介された。埼玉県では、アクティブ・ラーニングをとりわけ「協調学習」という視点で捉え、「多様性をリソースとして一人一人の賢さを育てる」ことを目標にしている。この学習法においては、与えられた課題について生徒自身が自分の言葉で説明したり、他者の考えを聞いたりしながらそれを吟味し、自分の知識や考えをより高度なものへと昇華させていく。この「協調学習」において用いられるメソッドの一つが「ジグソー法」である。

講演者によると、埼玉県内における「協調学習」の導入は、平成22年には10校であったが、平成28年には102校に増加し、今やそれは全体の７割にまで達している。また、近年では教員の初任者研修においてもそれのインストラクションが行われるようになり、県内に「協調学習」という学びの「型」が広く浸透しつつある。しかしながらそこにはまだいくつかの課題が残されており、たとえば校内の管理職者による理解、教材作りの困難さ、そして客観的データの不足や効果検証の必要性などが挙げられた。とりわけ最後に挙げた点は、教育・学習という観点からはもっとも重要であり、「協調学習」がいかに知識の定着、学力の向上に有意義であるのかが客観的に示されねばならないだろう。

後半部では、その「ジグソー法」の体験が行われた。それは「エキスパート」、「ジグソー」、「クロストーク」という３つの手順によって進められる。ここでの課題は、「あなたが戦国大名ならどこに城を築きますか？」であった。参加者は初めに自分自身の考えで地図上のどこに城を築くのかを決め、それから３名～４名のグループに別れた。それぞれのグループには、「軍事」、「政治」、「経済」のうち、どれか一つの観点から解説された資料が配布され、その一つの観点からどの場所がもっとも築城に適しているのかを考えた（エキスパート）。それから他の二つの観点からの考察を行ったグループにいたメンバーと再度グループを組みなおし、それぞれが第一のグループで得た知識を共有し合った（ジグソー）。その後、第二のグループ内で３つの観点から再度どの場所がもっとも築城に適しているのかを話し合い、グループとしての結論を導き出した（クロストーク）。それぞれのグループが結論を発表した後、再び参加者は個々に自分

の結論として、「どこに城を築くのか」を考えた。実際にこの授業を行った或る教師の報告によると、最終的な個々の生徒の結論は、最初にそれぞれが考えていたものよりも多くの多様性を示すものであった。

このように、明確な正解がない問題に関して、一人では満足な答えが出ない課題を他者との協調によって解決を図るのが「協調教育」であるが、もちろんそれは必ずしも教育者が意図していた結果へと導かれるわけではないので注意が必要である。講演者によると、たとえば、比較的よくできる生徒がすべて一人で解決してしまうことや、ただ調べたことを発表して終わるだけで発展がない、あるいは話すきっかけがつかめないなど、クラスや生徒の実情や学習の成果という観点が留意されねばならない。「協調学習」が評価すべきことは、一人一人の生徒が課題に対する自分の考えを押し広げ、前進させることができたかであり、それが次の学びへとつながり、次の授業が「分かる」チャンスになることが肝要である。

本研究会の最後に質問として挙げられた点は、ここで言う「協調」なるものが、「予定調和」を前提とすることへの問題点、そして考え方の「多様性」が収束不能なほどに大きく振れた際への不安であった。それに対する答えは、高等学校の授業内で行われる課題である以上、そこには「予定解」が用意されていなければならず、それを前提とした授業の設計であれば、それほど飛躍した考えは出てくることはまずあり得ないということであった。本研究会は90分という短い時間ではあったが、本学に入学してくることの多い県内で学ぶ生徒の学習スタイルを知ることができたため、参加したすべての教職員にとって有意義な学びの場となった。

（文責：齊藤　伸［さいとう・しん］聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター）